

東北大震災と『ともにある』

山形国際ドキュメンタリー映画祭

高野史枝

すでに組まれていた支援上映プログラム

10月6日、山形ドキュメンタリー映画祭へ向かう新幹線の中で「上映作品中に、東北大震災をテーマにしたものが何本かはあるかな」と考えていた（ギリギリまで仕事してたので上映プログラムは見てませんでした）。山形に直接の被害は少なかったとはいえ、同じ東北地方に起きた未曾有の大災害。しかし映画祭でまとめて取り組むには時間が足りなかったよね、震災関連ドキュメンタリーの特集が組まれるのはきつと次回だな…と思った私。違っていました。山形ナメてました。映画祭の柱に、ちゃんと大きな特集『ともにある』（東日本大震災復興支援上映プロジェクト）があったのだ！

この上映プロジェクトは、大きく分ければ

- ① 被災地に入り現場に向かいあった作家の作品紹介（トーク、シンポジウム）
- ② 過去に作られた地震、津波、原発に関する作品の上映
- ③ 映画祭で上映された作品をユニット化して被災地で巡回上映

大震災をテーマにした作品を大都市で上映

ということになる。③、④はこれからの課題としても、大震災からわずか半年しか経っていないこの映画祭で、震災後に作られた映画25本、関連映画4本が上映され、シンポジウムが2つも行われたというのはほんとにすごい。山形ドキュメンタリー映画祭スタッフの熱意と力量は、私メの想像をずっと上回っていた！

立ちすくむ映画作家：『311』

（2011年／日本／森達也、綿井健陽、松

林要樹、安岡卓治）

被災後作られた映画を5本ほど見たが、強烈な印象を残したのは『311』だった。

震災が発生した2週間後、ドキュメンタリー作家4人は被災地へ向かう。まず行ったのは福島第一原発周辺。4人はロクな装備もせず30キロ圏内に入るが、そこに人は誰もいない。測定器はピーピー鳴り続け、指し示す数値は規定量の百倍近い。装備を整えて（貧弱）原発のある大熊町に再度向かうが、車の故障もあり、取材は中止。その後一行は津波の被害が大きかった地区を縦走する。そして多くの犠牲者を出した石巻市立大川小学校近くでは自分の子の亡骸を捜す母親と会話するが、死体写真を撮っていると誤解を受け、地元男性の厳しい抗議を受ける…。

この映画が心に響いたのは、「震災そのもの

を描くというよりも、「被害を受けなかった人たちにも、破壊と大量の死は何らかの影響を与える」という状況を、自分の身をもって描いていることだ。

上映後のトーク時、4人の監督のうちの1人、安岡卓治氏が「この取材のきっかけは、森さんの文章の中にあつた『うしろめたさ』という言葉でした」と語った言葉がストンと胸に落ちた。

「そう、私が感じていたのもうしろめたさだったんだ！」という共感。同じ日本人なのに、住んでいた場所の違いだけで運命は天と地ほど違う。東北で被害にあつた人々は家も職も肉親も、自分の命さえも失くしているのに、自分たちは何一つ失くしたものもなくヌクヌクと暮らしている…それを自覚すれば、誰だって「うしろめたさ」を感じずにはいられない。その現実を突きつけられ「たじろぐ姿」が率直に表現されていた。

測定器がピーピー鳴ると、ビビるあまりはしゃいだような声を出してしまったり、地元の人から「死体の写真がネットで流れてたんだよ。あんたらもおんなじメディアだべ！」と詰問されると「メディアが違います」と反論しつつもシニオンとしてしまうシーンなど、「立ちすくむ自分たちの姿」を、隠すことなくさらけ出してリアリティーがあつた。

今また輝く名作：『生命 希望の贈り物』

(2003年／台湾／呉乙峰)

「過去に作られた地震、津波などを扱った作品」という枠で上映されたのが『生命 希望の贈り物』私は2003年に来たときに見て、呉監督にインタビューまでしている。それなのに、今回もう一度この作品を見直したとき、「まるで別の作品じゃないか」と思うほど受ける印象が違った。前見たときはタイトルの「希望」のところが印象が強く、「新しい命を生み出す＝希望の再生」という、どちらかというと「明るい」ドキュメンタリーという印象だった。しかし今回見直したこの映画に感じたのは「深い悲哀」だった。

1999年9月21日、台湾中部を大地震が襲う。両親を亡くした姉妹、兄以外の一族全員を失った女子大生、幼い子どもを母に預けて日本へ働きに行き、その母も子も土に埋まった夫婦がいる。その家族を追う監督の父もまた、認知症を患い父本人が死を願うような状態だった。

監督が友人と交わす手紙を軸にして物語は展開されるが、その友人も既に死んでいることが最後に明かされる。父の死期も近そうで、監督の周りにも死の気配は濃い。肉親を飲み込んだ土を、あてどなく棒切れで掘り返している遺族。なかなか新しい生活に踏み出せず、その場所から離れられない人々の表情を監督

は丹念に追うが、その遺族の姿は監督自身とも重なっているようだ。十分な悼みを尽くさない限り、人はそう簡単には前には進めないものだったのだ。東北大地震の状況を知る前、自分は悲しく辛いことから目を背け、手軽な「希望」で前に進めると思う浅い心しかもつていなかった…と気がついた。

ゲストとして登場した呉監督は、その後の年輪を刻んだ表情で「人間は記憶する能力と想像力を働かせる能力がある。辛い体験を記憶するからこそ、立ち直っていける」と語った。

コーディネーターに聞く

「ともにある」プロジェクトのコーディネーターで、山形ドキュメンタリー映画祭理事の宮澤啓さんにお話を伺った。映画祭の第1回から関わり、長く事務局長を勤めていた彼をご存知の方は多いはず。私も映画祭に行くたびインタビューのアレンジをしていただったり、蕎麦や酒の美味しい店を紹介してもらったり、ずっとお世話になっている。宮澤さんにお目にかかるのも、山形を訪れる楽しみのひとつなのだ。

2年ぶりに会った宮澤さんは見違えるほどスマートになっていた。「これは上映ダイエツトですよ」と冗談。最初は山形へ避難している人達向けに、5月からは被災地へ入っての

上映活動をずっと続けるという重労働を続けた結果だそう。

「こういう時だからこそやらなくてはならないと思い、震災直後から避難所や被災地で上映会を始めました。映画どころじゃないだろう、という人もいましたが、反論もせず余計なことも言わず、淡々と上映会をやって行きました」。最初に被災地に入ったのは5月5日のこどもの日。「石巻の避難所に行ったんですが、プールに車が浮かんでいたり、お墓とお墓の間に車が突き刺さっていたり、映画よりシュールな光景を見ましたよ」。

そんな場所で宮澤さんが上映したのは『キユーポラのある街』とアニメの『こまねこ』。みんな楽しそうに見ていたという。「ありがと。また来てね」といわれると、嬉しくて、ヤッターと思いますね」。

その後も上映を続けながら東北の各県にある映画祭と連携し、お互いの映画祭を支援する声明を出したり、震災関連の作品をできるだけ外国に発信していく体制作りをしたりする活動は続く。

「震災プロジェクトをこれからの山形の柱にしていかなくはなりません。ますますやめられなくなりまして」と苦笑する宮澤さん。映画の持つ力を信じ、地道に活動を続ける宮澤さんの姿は、山形ドキュメンタリー映画祭の姿そのものだった。

詩情あふれる中国のドキュメンタリー

中国のドキュメンタリー映画は、国から疎まれていたらしい。3年前、しばらく北京に住んでいたとき、ドキュメンタリー映画を上映している所はないかな…とずいぶん探したが、映画館でやっているところは結局見当たらなかった。ドキュメンタリー映画の素材に社会のゆがみや問題点が多いのは当然で、さまざまな問題を抱えながら前進しているような中国では、何を描こうと政府・政治批判につながるってしまうのは仕方ないところ。都合の悪いことはできるだけ隠したい中国政府がドキュメンタリー映画を嫌い、簡単には上映を許可しないのは当然かも知れない。作家もそんな政府とのカケヒキに長けてきたのか、直接的な批判ではなく、芸術的な昇華を心がけながらの作品作りがうまくなっているな、という印象を受ける。雲南ドキュメンタリー映画祭など省単位の映画祭もあるようで、今回インターナショナル・コンペティションの優秀賞を受けた『阿仆大(アプダ)』(2011/中国/和淵)はその映画祭から出てきたものらしい。

この作品は、いかにも「民族の美しい特性を謳い上げる」という内容で、決して検閲は受けられないだろう。しかし私にとって『阿仆大(アプダ)』はあまりにも冗長すぎ退屈で、どうして優秀賞を受賞したか理解できなかった。

わが最優秀作品はこれ!

『雨果の休暇』(2011/中国/顧桃)

今回山形で見た中国のドキュメンタリー作品の中では『雨果の休暇』が圧倒的によかった。私的には、今回見た25本の中の最高点はこの作品だ(祝 小川紳介賞受賞!)。中国政府の少数民族政策への批判を底に秘めながらも、映画の中心になるエヴァンキ族の女性、柳霞(リュウシャ)の天真爛漫な魅力や、内モンゴル・オルグヤの詩情あふれる自然描写がすばらしい。

無錫にある学校の寄宿舎にいた柳霞の一人息子、雨果(ユイグオ)が、故郷オルグヤの森に戻ってくる。全身で喜びを表す柳霞。戸惑いながらもそんな母を気遣う息子。しかし休暇は終わり、再び息子が町へ戻る日がやってきた…。

トークに現れた顧桃監督は大柄で朴訥、まるで熊のようにノッソリした雰囲気の男性で、私の知っている中国人の感じとずいぶん違う。それもそのはず、監督自身の出自もモンゴル系のオロチョン族という少数民族だった。

顧桃監督インタビュー

—この映画の背景は

私は2005年から大興安嶺のオルグヤ(地名)に通い、彼ら(エヴァンキ族)を撮り続けていて、2007年の山形ドキュメンタリー映画祭に出品した『オルグヤ、オルグヤ』はそのときの作品です。今回の作品は3年前から撮り始めたものです。主人公、柳霞の心にあるのは息子の雨果のことだけで、離れて暮らしているのが辛くて酒を飲まずにはいられないのです。私は柳霞を息子に逢わせてやりたい一心で、2007年にカメラも持たず雨果を寄宿舎に迎えに行きました。故郷に近づくにしたがって雨果の雰囲気が生き生きし、汽車の床に眠るなど野性もよみがえってくるようでした。それで私は汽車の乗り換えのとき、カメラを借りて、彼を撮り始めたのです。

—少数民族の問題をどう考えるか

少数民族が自分の土地から強制的に移住させられるという問題は、世界中で起こっていること。もう彼ら独自の生活や文化、風習、言語を守ることは無理でしょう。

私たちは映像を通じて、それをとどめておくことしかできないと思っています。これから撮る予定の映画も、また少数民族を扱ったものになります。

家事は人を鍛える：『昭和の家事』

(2009 / 日本 / 小泉和子)

山形まなび館

ドキュメンタリー映画が訴えかけてくるさまざまな問題に圧倒され、いささか疲れてフワリと入ったのが『山形まなび館』。

ここは昭和2年に建てられた山形市立第一小学校をそのまま転用し、市民の交流と学びの拠点にした場所だ。木造の建物がなんとも心地よく、座っているだけで疲れが抜けていくような気分になる。

実はここも映画会場のひとつになっていて、『昭和の家事』(全4部・355分)という作品の上映が行われていた。小さな教室で見ることが楽しそうで、予定には入れていなかったけれど「1部だけでも見ていこうかな」と思ったのが運のつき、結局午後1時から夜の7時半まで4部ぶつ通しで観ることになってしまった。おまけに小泉和子監督の講演まで聞くことに。なぜ家事の様子を淡々と描いただけのこの作品に、それほどまで心を惹かれたのだろうか。

昭和の専業主婦が持つ卓越した力量

『昭和の家事』は、昭和の暮らし博物館館長でもある小泉監督のご母堂(スズさん。撮影時80歳で、その後3年かけて撮影)に、昭和期主婦としてご自身が行っていた家事を再現してもらい、それを記録した映画だ。撮影

場所はスズさんが暮らしていた家(現在の昭和の暮らし博物館)。

1部「着物を解き、洗い張りをする。その布で夏掛け布団を作る。たらいと洗濯板、固形石鹸で洗濯をする」(90分)

2部「浴衣を縫う。お盆を迎える仕度いろいろ。お手玉作り。おはぎ作り」(90分)

3部「半纏を作る。おこわをふかす。白菜、沢庵を漬ける」(90分)

4部「掻巻を作る。お正月のお節料理を作る」(110分)

最初のうちこそ「あつ、洗い張り！若いころの母がやってたっけ。なつかしい」「そうそう、昔ウチにもたらいと洗濯板があつたよな」「...というように、ただただ懐かしい気分で見ただけけれど、そのうち「まてよ」と座りなおし目を凝らし始めた。

スズさん...というより、彼女が代表する昭和の主婦の、家事に対しての力量があまりにも卓越していて驚いたのだ。布団を作る着物を縫い直す半纏や掻巻を作るなどの仕立て屋であり、日常料理はもちろん季節に応じておはぎやお節料理もこなす料理人であり、洗濯(手洗い!)アイロンがけのクリーニング屋であり、家族が病気になるれば、その介抱もする看護人であり...

昭和の主婦って、私達など足元にも及ばない家事能力を持つプロだったんだ！

家事への複雑な思い

今ではその手順さえわからなくなっている昭和の主婦の家事技術を、こうしてフィルムに残したことは大きな意義があると思う。日本にもまた「記録しておかないと消えてしまう文化」があつたのだ！同時に私のようにずっと共働きをしてきた専業主婦には、家事に対しての強い警戒心がある。スズさんのように家事を大切にし、丁寧な生き方をすれば、それはきつと人を鍛える大きな力になり知恵も育つただろう。しかし家事は社会に出て働くとき、足を引つ張る厄介なヤツでもある。今また、昭和期のように家事がすべて女性の役割だということになったら大変だ。これに対し、小泉さんはこんな提案をした。

「まず、家事と家長制を切り離すことです。歴史的に家事は全部女性が担ってきました。それが男尊女卑と結びつき、家事の価値を低く見る風潮ができたのです。家事というものは生きていくうえで不可欠なことです。男でも子どもでも誰もがかわらなくてはならないことなのです」。

まったくその通り。問題はそれがなかなか実行されないことだ。家事に対しての力量を高めると同時に、それを男女、親子で分かち合う新しい家事文化の創造が必要なのだ。それは今後の大きな課題だ、と、改めて考えさせられた映画だった。